学苑・文化創造学科紀要　No. 805　(9)～(15)（2007・11）

『八月の光』(17)

――バイロン・バンチに関する一考察（承前）――

佐　藤　道　子

はしがき

『八月の光』(16)[1]において，作品の舞台である1930年頃のアメリカ南部社会について検討した。言うまでもなく人間の共同社会は，「生命」を根本原理とし，「生命」の継承によって存続していくものであるが，この共同社会の実体には，人間的自然を認めない厳しい宗教的倫理的規範があり，こうしたものを含めて社会の規範に反するものを排除するという一面があることを明らかにした。

本論3からは，異質のものは排除する人間社会における〈生命の動き〉について，〈生命の動き〉と生命の継承との関係を視野に入れながら，登場人物を通して考察し，最後にバイロンの〈生命の動き〉に託された作者の意図に言及したいと思う。

なお，本論の性格上，既発表の『八月の光』論中の記述と重複する部分もある。

3

そもそも生命とは何なのか？　生命を一言で表せば「生物が生物として存在できる，本源のちから」[2]であり，それは生命エネルギーとでも呼べるもので満ちているといえよう。

周知のように，人間の生命は先史以来，創造活動を行い，現在に至っており，その生命体は，他の生きものと異なり，文明・文化を持つほど著しく発達した大脳を持っている。この大脳は言語，思考，智恵といった精神作用の場であり，感覚や意欲の中枢であり，そして意識活動を行っているわけである。意識とは「われわれの知識・感情・意志のあらゆる働きを含み，それらの根底にあるもの。」[3]である。

したがって，人間の〈生命の動き〉を，人間の人間たるゆえんである意識活動につながる〈意識の動き〉と捉えることも，捉え方のひとつとして可能である。そして，それは生命エネルギーに裏打ちされているといえよう。こうした観点から論を進めていく。

では，生命の動き，すなわち意識の動きはどのようにして起こるのであろうか？

そもそも，意識活動をつかさどる人間の脳は，その「細胞内にあるDNAの総体」[4]であるゲノムと，どのようにして関わっているのであろうか？　この疑問は，生命誌において「生命を，『細胞内に置かれたゲノムのはたらきによって自己創出する系』とする」[5]中村桂子氏の論によって解決した。氏は，生命系内の免疫系および，神経系，特に中枢神経系の主要部である脳に焦点を当て，次のように述べる。

> ゲノムの情報の下で自己創出する生命系は，でき上った免疫系，神経系の中にも自己創出という性質を与えている。その性質を持ったそれぞれの系は，外部との関わりの中でそれぞれの歴史を持ち，外部の影響を大

きく受けた系になる。免疫系の場合，誕生以来どんな異物と出会うかによって個人の免疫系のありようができ上っていく。人工系が発達し，思いもよらぬものに出会った時どう対処するか，免疫系の可能性が試されることも少なくない。近年アレルギーが増加しているのは環境の大きな変化を背景にしている。それは明らかにこの系がゲノムの支配下にありながら，時代を反映した系を作ることを示している。そしてまたその時代の中で一人一人が特有の系を作ることを。脳の場合，外部からの影響が非常に大きく，ゲノムとの関わりは無視できるほどと言ってもよいかもしれない。そのうえ，免疫系ほどにその系がどのようにしてゲノムと関わっているかはまだ解明されていない。しかし，生命系という自己創出系の中の自己創出系という位置づけは変わらない。6)

すなわち，脳は自己創出系であり，「ゲノムとの関わりは無視できるほどと言ってよいかもしれない」6) くらい，外部から大きく影響され，各人各様の特有の系を自己創出するのである。

ということは，脳の意識活動はゲノムにあまり関係なく，外部から大きな影響を受けるということであり，各人はそれぞれ特有の意識の動きを示す，ということになる。そして，生命誌において免疫系に大きな影響を及ぼす外部のものが，誕生以来出会う様々な異物であるように，生命誌における神経系の脳に，本論に即して換言すれば意識に大きな影響を与える外部のものとは，他者としての人間社会であると言えよう。つまり意識の動き（生命の動き）は人間社会との接触によって起こるのである。したがって，意識の動き（生命の動き）を探究するために，〈意識はどのようにして人間社会と関わっているか〉を，心理的に考察することは，極めて有効といえよう。

さて，脳，意識，「認識・感情・意志・行動の主体」7) である自我，性格，「性格とほぼ同義で，特に個人の統一的・持続的な特性の総体」7) である〈パーソナリティ〉の五つは意味上，ひとくくりにすることができる。

この中の〈パーソナリティ〉に関して，ライヒは『性格分析』8) において三層からなる心理生物学的構造を明らかにしている。この構造について，小此木啓吾氏は『エロス的人間論』9) の中で，分りやすく解説しているが，それを要約すると，次のようなことである。

ライヒによると人間は「三層の心理生物学的構造」を持つ。第一の層は社会に対して適応する「表層の自我」。第二の層は「無意識層」。これは抑圧や禁止等によって「病的になってしまったエロス」，即ち異常な嫉妬心，残忍なサディズム，狂的色情など種々の「煩悩となったエロス」から成り立つ。そして第三の層は「自然の生命の摂理にかなった豊かなエロスに満ちている。この第三層のエロスは，生命そのものであり，肉体にその源泉をもつ」のである。10)

エロスという言葉については様々な概念あるいは定義があるが，ここでは本論にもっとも関連する小此木啓吾氏の言を以下に要約する。

エロスは生得的本能であり全体にわたって快感原則に忠実であるが，その上本質的に他者との間に「満足の共有・欲求の一致」をねらっており，したがってエロスは「相互的，対話的なコムニケーションの欲求」といえる。換言すれば，それは初期の母子間のコムニケーションをその原型とするが，人が大人の男女関係をはじめとして様々の「人間関係をそして社会集団を形成する根源的な欲求」である。11)

すなわち，肉体に本源を持つ生命はエロスという本質から成り立つ。この意味で生命は，快感原則

に忠実であるうえに，本質的に他者とのあいだに満足や欲求の合致をめざす相互的なコムニケーションの欲求を持つと言えよう。したがって生命の動きを観れば，第三の層の「生命そのものである」[10] エロスが，第一の層の「表層の自我」[10] すなわち社会的自我と自由に交流できる場合，病的に変化したエロスの層は創られず，精神生活は自然のままの自由な「生命エネルギーの顕現」[12] となる。[13] 裏返せば，生命エネルギーはその源と外部・人間社会との間で，自然のままに自由に躍動しており，これがこの場合における〈生命の動き〉の実体である。

一方，第三の層のエロスと第一の層の社会的自我との間に病的なエロスの層を内在させた構造を持つ人間の場合，第三の層の「生命そのものである」[10] エロスと第一の層の「表層の自我」[10] すなわち社会的自我との自由な交流は存在しないということであり，その精神生活には，不自然な生命エネルギーが観られるであろう。その生命エネルギーは，その源と外部・人間社会との間で不自然に，たとえば呪縛または束縛されているように，あるいは現実から逃走または浮遊しているように，あるいは嗜虐的または暴虐的に，あるいはあたかも沈滞しているかのように淀むように動いているにちがいない。そして，これは病的なエロスの層を内在させる場合における〈生命の動き〉の実体である。

ここに，人間の生命の動きは無意識という底を持つ意識の動きと表裏一体の関係にあり，本質的に相互的なコムニケーションを欲求する人間の生命のありようには，1)〈自然で自由な生命の動き〉と，2)〈不自然な，たとえば何かに呪縛されたような生命の動き〉の二通りがあることが明らかになった。前者のイメージは，〈明〉あるいは〈豊饒〉，後者のそれは〈暗〉あるいは〈不毛〉などであろう。

無論，社会の中にあって，すべての人間各個人における〈生命の動き〉は多様であって，上述の前者または後者に文字通りに二分されるわけはない。大多数のものは時の流れの中で，いわば〈明〉と〈暗〉のグラデーションにおける異なる一点を，瞬間瞬間に示しながら推移していくのである。したがって本論では，各人の〈生命の動き〉を観る場合，〈総体的にどちらかと言うと前者〉を含めて前者とし，〈総体的にどちらかと言うと後者〉を含めて後者とする。社会にあって，両者は並存しているわけだが，生命そのものの継承につながるのは，前者の方ではなかろうか。

4

では，『八月の光』[14] の登場人物の生命の動きはどうであろうか？

〈自然で自由な生命の動き〉は，リーナ・グローブ，アームステッド夫婦，そしてバイロン・バンチなどに，〈不自然な，たとえば何かに呪縛されたような生命の動き〉は，ジョー・クリスマス，ドック・ハインズ夫婦，サイモン・マッキーチャン夫婦，ゲール・ハイタワー，ジョアナ・バーデン，ナサニエル・バーデン，パーシー・グリム，ルーカス・バーチなどに観られると思う。

以下，まず後者について〈ジョー・クリスマスの生命の動き〉から考察し，次に前者に関して〈リーナ・グローブの生命の動き〉から検討し，最後に〈バイロン・バンチの生命の動き〉に焦点を当てる。

ジョー・クリスマスの生については，『八月の光』(2)[15]～『八月の光』(3)[16] において，〈ジョー・クリスマスの悲劇について〉という副題のもとに考察したように，一見白人風の生まれながらの孤児ジョー・クリスマスは，一言で言えば，永遠にアイデンティティが不明なゆえに，生きているかぎり帰属の場所をどこにも持てない孤絶の苦悩の生を送った。彼の意識は，自己同一性を喪失したまま，

1）白と黒，白人と黒人，2）男性と女性，3）明と暗，4）自然と文明，5）合理性と不合理性といった相対立するイメージや観念にとらわれ，その狭間で苦悩した。裏返せばこれらの問題は，その未解決において終生彼を苦しめたのであり，彼の人生そのものを構成していたのであった。

このような彼の生を支えていた彼の生命そのものは，当然，純正無垢のはずである。その彼の生命の動きを把捉するためには，いま少し詳しく彼の生を振り返る必要がある。

私生児ジョー・クリスマスは，その出生前に遺伝子上の父親を，出生直後に母親を，狂的人種偏見に染まった彼の母方の祖父ドック・ハインズに抹殺され，それから僅か2，3ヶ月後のクリスマスの夜，この祖父により，母代わりの祖母の手からもぎ取られ，孤児院に捨てられた。つまり，祖父の狂的人種偏見による数々の暴力的言動は母体を通して胎児の彼の生命にも影響を与えたであろうから，彼の生命は受胎直後から，すなわち誕生前から既に人種偏見の呪縛を受けたのであり，また誕生直後から肉親の母性愛を奪われたのであった。

ジョーを捨てても "I feel the teeth and the fangs of evil!"[17] といった妄想に駆られるドック・ハインズは，"It's that bastard. Your work is not done yet. He's a pollution and a abomination on My earth."（386）という神の声をいわば幻聴した。

そのため孤児院で身元を隠して釜炊きとして働きだした祖父ドック・ハインズに，ジョーは監視された。孤児仲間から "Nigger"（127）とよばれ，仲間はずれにされ，影のような存在であった。テキストに書かれてはいないが，行間に，ドック・ハインズが子供たちにジョーを "Nigger"（127）と呼ぶよう，巧みに暗示したかもしれない可能性が浮かび上がってくる。その様な日々の中で3歳のころ，彼は年上のやさしい少女アリスに女性的な温かさを感じたこともあったが，まもなく彼女は，恐らく他所へ貰われて，去っていった。そして5歳のある日，〈女性的なものに対する無意識的嫌悪〉と〈黒のイメージに対する潜在的恐怖〉を抱くことになる体験をした。

それは，〈1年くらい前から，彼は昼間，無人になる女栄養士の部屋に忍び込み，ピンク色の甘い味の練り歯磨きを舐めて遊んでいたのだが，ある日たまたま部屋に戻ってきた彼女と愛人との情事の現場の陰に隠れざるをえない羽目に陥り，その場でうっかり相当量の練りものを食べ続けたために，それが吐き戻されてきて，結局見つかってしまったこと〉に端を発する。院長への告げ口を恐れた女栄養士は，口封じのつもりで彼に一ドル銀貨を受け取るよう執拗に迫ったが，彼は手を出さない。幼い彼に，情事の意味も，買収といった大人の計算も分るはずはなかったからである。彼は内心，ただ〈こっそり彼女の部屋に忍び込み，練り歯磨きで遊んだ罰として，早く打たれて解放されたい〉と切望し，〈何故罰せられないのか？　銀貨と引き換えに何を要求しているのか？〉と，彼女に不可解の念ばかりか，怒りも感じ，ついには，果てしなく並んだ，〈桃色で柔らかな〉練りものの入ったチューブが目の前に現れて，迫ってくるような気さえした。黙している彼に激怒した彼女は，彼を "Tell, then!　You little nigger bastard!"（125）と罵った。

幼児にとって，大人は圧倒的，絶対的存在である。女栄養士によって引き起こされたこの出来事によって，彼は〈桃色で柔らかな〉イメージのもの，即ち〈何か女性的なもの〉を不可解で邪悪のものとして無意識的に嫌悪することになり，そしてまた，〈nigger〉のイメージすなわち〈黒のイメージ〉に対しても潜在的な恐怖を抱くようになった。まさに嫌悪と恐怖の幼児体験であり，また，この出来事により記憶の底に〈自分はnigger にちがいない〉と深く刻まれたのである。

この出来事の後まもなくジョーは養子に出されたが，養父サイモン・マッキーチャンは異常な宗教的偏見の持ち主であった。たとえば教義問答書を覚えられない僅か8歳のジョーを鞭打ち，幾時間も立たせ続け，ついにジョーが気絶してもまったく意に介さなかった。あるいは事あるごとに，床にジョーの“the prints of knees”(279) がつくほど長時間，神への懺悔の祈りを強いた。幼いジョーの情念の中に，養父マッキーチャンへの，取りも直さず〈神という言葉〉への憎悪が芽生えたのは当然であろう。

またマッキーチャンは〈宗教的善悪二元論による信賞必罰主義〉[18] の持ち主であり，必罰は無論，功績の方も取り上げた。たとえば，思春期のジョーが恋情を忘れるためにではあるが，牛の世話に没頭した折に，勤労の報酬として若牛を与えた。こうした主義には，自分の行為に対する相手の対応が予測できると言う点で，女性栄養士により体験させられたような〈不可解さ〉に思い煩わされる恐れはなく，ジョーは二元論の苛酷さを憎悪しつつも，二元論的思考に染まっていった。同時に，その主義特有の男性的潔癖感が彼の内奥に培われていった。罰としてジョーに食事を与えようとしない夫に内緒で食事の差し入れをする養母マッキーチャン夫人の親切を，後ろめたさの共有をほのめかす〈女性的なもの〉と感じて，ジョーは空腹に耐えかねていたにもかかわらず，潔癖感と相俟って極度に嫌い，拒否したのである。さらにまたマッキーチャンは，カルヴィニズムを歪めて解釈した「黒と白は，善と悪に取って代わる，あるいは善と悪と同一なのである」[19] とする当時の黒人観を信奉していたはずであるから，この観念はジョーにも植え付けられたにちがいない。

すなわち，ジョーは養家で思春期を終えるころまでに，彼の意識の底に，孤児院時代の幼時期に芽生えた〈女性的なものに対する嫌悪や黒のイメージに対する恐怖〉の念を根強く蔓延らせるに至り，さらに加えて，〈神と言う言葉に対する憎悪の念〉も深く刻み付けたのである。だから，15歳の折，近所の少年仲間と順番に黒人少女をレイプすることになった時，自分の番になり一人で小屋に入ったジョーは，たちまち“the womanshenegro”(156) に囲まれたと感じ，彼女の眼が“reflections of dead stars”(156) のように見えてきて，憎悪と恐怖のあまり彼女を乱暴に殴り続けたのであった。また，少年仲間の口から，女性の毎月の生理について初めて知った時には，羊を撃ち，死にかけた動物のまだ温かい血の中に両手を入れて，震えながら“immunity”(187) を得なければならなかったのである。

こうして17歳の秋を迎えたジョーは，偶然マッキーチャンと入った裏町の安食堂のウェイトレス，ボビーと恋仲になった。寝物語に，“I think I got some nigger blood in me.”(196)，“I dont know. I believe I have.”(197) と打ち明けたが，彼女は信じなかった。マッキーチャン夫人の臍繰り金を盗み，養父母に秘密でデートを続けていくうち，彼女が売春婦であることを知り，泣くほどのショックを受けたが立ち直り，二人でダンスを楽しみだした。そしてある夜，ダンス会場に乗り込み「失せろ，売春婦！」(204) とボビーを面罵したマッキーチャンを，ジョーは椅子で打ちのめした。

しかし，ボビーと一緒に逃げようしたジョーは，〈殺人犯の巻き添えになりたくない〉としてこれを拒むボビーから，“Bastard! Son of a bitch! Getting me into a jam, that always treated you like you were a white man. A white man!”(217) と罵倒される手ひどい仕打ちを受けたのだった。

この直後18歳のジョーは独り，逃走の旅に出た。〈黒人の血を持っているにちがいない〉という思いから白人社会にも入り込めず，一見白人風の肌ゆえ，そしてまた〈黒のイメージ〉に抱く恐怖感から，黒人社会にも居場所を見出せないまま，南部のメキシコ，あるいは北部のシカゴへと職を転々と

しながら流浪した。夜，一人で道路を歩いてゆく姿は，「砂漠の真中に立つたった一本の電柱よりも孤独に見え」(114)，さまよう「幽霊」か「亡霊」(114) のようであった。

ジョーが〈物語の舞台であるミシシッピー州の架空の町ジェファスン〉の近くで南へ向かう貨物列車から飛び降りた時には，33歳になっていた。その日の夜，森の中の一軒家に忍び込み食べ物を得ようとしたジョーは，屋敷の窓の灯りが消えるまで雑木林の中で地面に腹ばいになっていた。昼間，道行く少年からその屋敷には白人の中年女性が独りで住んでいると聞いたからである。大地に伏した「彼は，太陽を浴びたことのない地面がゆっくりと受容するように，衣服を通して自分の体を打つのを感じた，股間に，腰に，腹に，胸に両腕にそれを感じ」(228)，「彼の鼻腔では暗くて豊饒な大地の湿った濃厚な匂い」(229) がした。

この屋敷の女主人ジョアナ・バーデンは，先祖が北部出身ということで町の人々から疎外されており，近隣に住む黒人の相談相手などを務めていた。ジョーは彼女の情夫となったが，彼女との間に，先に述べたような〈相互的なコムニケーション〉は一切なく，それは放浪時代の売春婦たちとの関係に通じる，いわば排泄のための関係にすぎなかった。やがて厳格なピューリタンとして情欲の罪の意識に苦悩しはじめたジョアナは，神への懺悔の祈りをジョーにも強要し，為に幼少時の神への憎悪の念が沸き起こったジョーは，彼女を殺害し，再び逃走した。

そしてある夜明けに，彼は「呼吸をするごとに自分自身がくすんだ灰色の大気の中に溶け広がるのを感じ，怒りや絶望を知らない〈孤独と静寂〉と一つになった」(331) と感得した。36歳まで生きてきて初めて認識した一体感であり，解放感であった。が間もなく捕われ，白人優越主義のナチ的青年パーシー・グリムによって虐殺された。

虐殺されたにもかかわらず，死にゆく彼は「平和で，測りがたい，そして耐えがたい」(464) 眼で周囲の人たちを見上げていた。

25年に及ぶ長い流浪の最後の夜，33歳のジョーは大地との，すなわち自然との一体感を感得した。このシーンは，「心理生物学的構造」[10] 上における彼の第三層に宿る「自然の生命の摂理にかなった豊かなエロス」[10]，すなわち「生命そのもの」[10] が，第一の層を超越して，自然界と交流していることを，彼が無意識的に感得していたことを示唆する。

しかし，この彼のエロス，「生命そのもの」[10] と第一層の社会的自我との自然で自由な交流は，換言すれば〈相互的なコムニケーション〉は，彼の生涯を通して，わずかに幼児の頃のアリスとの淡い交わりとボビーとのつかの間の恋において一瞬，観られたのみであり，無きに等しいと言えよう。「心理生物学的構造」[10] 上，彼のエロス，「生命そのもの」[10] が人間社会と全く交流していなかったということは，人間社会に存在していなかったに等しい。彼は〈幼児の頃は影のようであり，長じては居場所を求めてさまよう幽霊か亡霊のようであった〉とされるゆえんである。

このように，自己同一性を求めながら得られず，相対立する観念やイメージの狭間で苦悩し，人間社会から逃れ続けてきた36歳の彼が，夜明けの，白でも黒でもない灰色の自然界に一体感と解放感を覚えた時，〈これこそ，自分が一生，求め続けてきたものであったのだ〉と初めて認識した。すなわち，彼の第三層のエロス，「生命そのもの」[10] が，誕生以来，初めて自由な交流（一体感と解放感）を持ったのは，人間社会を超越して，自然界とであった。彼のエロス，「生命そのもの」[10] は，それが本質的に求める人間社会との相互的なコムニケーションを生涯持つことができなかったのであった。

ここに，彼の〈生命の動き〉（意識の動き）は，1）人種偏見，2）宗教的偏見，3）〈女性，あるいは女性的なもの〉の観念や〈黒〉，〈白〉のイメージなどに呪縛され続けた，極めて不自然なものであったことが明らかになった。これを「心理生物学的構造」[10] 上から観れば，彼のエロス，「生命そのもの」[10] は誕生以来，死に至るまで，生得的本能において第三層から相互的コムニケーションを求めて人間社会と接する第一の層に向かっては断絶され，第二の無意識層に封じ込められることの繰り返しであった。

したがって彼の〈生命の動き〉（意識の動き）は，自分を拒絶した人間社会を存続させる生命の継承に反発こそすれ，それを肯定し受容することはあり得ないといえよう。（続く）

＜註＞

1) 佐藤道子「『八月の光』16」（「学苑」798 号，2007）
2) 金田一京助・佐伯梅友・大石初太郎編『新選国語辞典 「常用」新版』（小学館，1986）
3) 新村出編『広辞苑　第三版』（岩波書店，1985）
4) 中村桂子『自己創出する生命』（筑摩書房，2006）p. 27
5) Ibid., p. 98
6) Ibid., p. 187
7) 新村出編『広辞苑　第三版』
8) ウイルヘルム・ライヒ　小此木啓吾訳『性格分析』（岩崎学術出版社，1994）
9) 小此木啓吾『エロス的人間論』（講談社，1991）
10) Ibid., pp. 199－200
11) Ibid., pp. 40－42
12) Ibid., p. 201
13) Ibid., pp.199－201 参照
14) William Faulkner, *Light in August* (Vintage International, 1990)
15) 佐藤道子「『八月の光』2」（「学苑」556，1986）
16) 佐藤道子「『八月の光』3」（「学苑」568，1987）
17) William Faulkner, p. 386
以下，本文中の数字は同書からの引用頁を表す。邦訳は筆者に拠る。
18) F. Pitavy, FAULKNER'S *Light in August* (Indiana Univ. Press) p. 97 参照
19) O. W. Vickery, "The Shadow and the Mirror: *Light in August*," in D. L. Minter ed., *TWENTIETH CENTURY INTERPRETATIONS OF LIGHT IN AUGUST* (New Jersey: Prentice-Hall, Inc., 1969) p. 33

（さとう　みちこ　　文化創造学科）